

---

# 好きならもっと！

夢宮花音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

好きならもつと！

### 【Nコード】

N7588K

### 【作者名】

夢宮花音

### 【あらすじ】

高校2年の村上圭矢は、女子にモテる吉野の告られ現場を何回も盗み聞きしている。だがある時バレてしまい、それがキツカケで一緒に下校することに。

でも意外と2人は意気投合して…？

青春まつさかり！二人の甘酸っぱくて可愛い恋愛模様をご覧ください！

## 1 カミングアウト

「吉野くん…。私…吉野くんの事が好きなの。付き合ってくれん？」

「…ごめん、俺すきな奴がいるんだ。」

これで多分10回目くらい。

吉野が告られているのを目撃したのは。

正確に言つと、覗き見だけと。

「はあ、あいつ凄いな。」

俺、村上圭矢は、体育館裏に来ている2人を木の影からこっそり監視していた。

「そつ、そりゃそつだよね…！ごめんね吉野くん。じゃあ今の忘れて！また明日。」

ちよつと涙声になっている女の子は、同じクラスの三原真希ちゃんだった。

「いや、君が謝ることはないと思う。じゃあまた明日。」

「バイバイ…」

今にも泣きそうな顔で、言った真希ちゃんは、バタバタと足音をたてて走り去っていった。

あーあ、もったいない。真希ちゃんてすごいモテンのに。絶対男子うらやましがるだろ。もったいねえ。

そんな風に思いながらまだ木の影に隠れていた俺は、なんとまぬけな事に、落ちていた木の小枝を踏んでしまった。

パキ…とあからさまな音が足元からして、俺の体は硬直。冷や汗がたらーと頬を伝った。

「ん？誰かいるのか」

ざっざっとなんげを歩く音が聞こえる。

しまった！と思ったが、時すでに遅し。

異変に気づいた吉野が、木の方へと近づいてきた。

「は…え？むら…村上？」

目を見開いて俺を見つめる吉野。

真っ黒な髪が、風にふんわりとなびく。

あー最悪だ。

どうすることもできない俺は、必死に言葉を探した。

「あ…わりい。べ、別にそういうあれじゃないから。うん、ごめんね。悪い。さーせん。」

かるい動揺で、ろれつが上手くまわらない。  
とりあえず謝まる。

俺は頭をポリポリとかいた。

すると、吉野は

「なんで盗み聞きなんてしてたの？」  
と、不思議そうな顔で聞いてきた。

どうして…と言われても。

特に意味は…

言おうとして、俺は言葉を飲み込んだ。

「いや、なんかほんの出来心つつつか…悪気は無かった！ほんとに…！め…っ」

「あはは、別にそんなに謝らなくてもいいよ」

ニコッと笑う吉野を見て、思ったこと。

すげー可愛い。

なにこいつ。

こんなに可愛かったっけ!?

ていうかその前に男だぞ。

一瞬ときめいてしまった俺はなんなんだ。ホモか。

ノリつつこみ的なことをした自分に後悔しつつ、吉野をじいっと見  
つめてみた。

白くてきれいな肌。真っ黒くて日本人らしい髪の毛。ピンク色がか  
つた頬。

こいつは美人だ。

間近で見たことなかったけど、吉野ってこんなに綺麗だったっけか？

うつとりしていると、心なしか、吉野の顔が赤くなっていた。

「…な、なに？俺の顔になんかついてる？」

「あーいやいや違うごめん。なんか綺麗な顔だちだなと…」

「え…?」

まずい！つい口がすべった。綺麗な顔だちとか何言ってるんすか俺。

「あはは、いや、全然きれいくないよ。っていうか村上君の方がか  
っこいいというか…ワイルド」

ワイルド…?」

俺ってワイルド？

あ、髪の毛のせいかな。茶髪だし。

「っていうか今君付けした？村上君て」

俺がそういうと、吉野は、ああ。とまた笑った。

「なんかつい。くせ？みたいな感じ。ほら、あんまり喋ったことないからさ、おれたち」

まあ確かに…

普段、俺は吉野と違うグループのそこいるしな。

不良じゃないけど、非行にはしる前のちよいワル集団みたいな。

俺はその中の平岡武というヤツと特に仲が良い。

中学の時も、1年2年3年とずっと同じクラスだったし、高2の今現在も同じクラスだ。

そんな俺の親友武（通称たけちゃん）も、最近いつちよ前に彼女を作ったらしく、あまり一緒に登下校もしなくなった。

それで俺は今フリー状態なわけで。

「でもいいよな吉野は」

「へ？なにが…」

「なにがって、モテるからに決まってるでしょ」

ちよっぴり嫌味っぽく言ってしまった。

でも吉野は全然気にしていない様子で、  
「別にそこまでじゃないよ。村上君なんて彼女いるでしょ？」  
と笑った。

いや、いないんですけど。

「俺フリーだよ」

苦笑して答える。

それを聞いて、吉野は物凄く驚いたみたいだった。

えっ…と小さく声もれて、そのあとに「嘘だろー？まじかよ」と  
言った。

「残念ながら嘘じゃないです。11回も告白されてる吉野に比べて、  
俺は可哀相なことに1回しかされたことないわー」

「ん？ていうかなんでそんなに俺の告られた回数が正確に言えるの」

やばーまずい。

また口がすべった！

今までの告られ現場全部見てたなんていえねえよ。

どうして？と何回も聞いてくる吉野が、突然あ…と言った。

「もしかして村上君…いつも俺の告られ現場見てたの？今日みたく  
いに影にかくれて」

「ああ…いやー…えっと…はい。そうです。すみません」

もうこれ以上ごまかすきれないと思った俺は、素直に謝った。

すると、吉野くんは、ふーん…と言って俺を見た。

「村上君さ…俺がなんで女の子のこと振ってるか知ってる？」

「え、分かんないです…」

「俺さあ……ホモなの」

へえーそっか、ホモか。

ホモ……

…ホモツ！?!?!?

「はあああつ！?!」

え、ちょっと待て。

なにこれどつきり？

吉野がホモだつて？

うそだろおい…

あの女子にモテる爽やか男子が。

自分の顔がサーツと青ざめていくのが分かった。

ありえないだろ。ここにきてそんなカミングアウトされても困る。

「で、この際だから言っちゃうけど…俺の…」

と吉野が言いかけた時、

「おーい兄ちゃん！」

あ、この声は。

聞き慣れた声がして振り返ると、走ってきたのは弟の圭太だった。

「なに、どしたん」

吉野の言いかけた言葉がすごい気になったのだけど、急用っぽかったので仕方なく弟にたずねてみる。

「聞いてよ兄ちゃん！母さんが犬拾ってきた。」

「だ、だからなんなの」

全く訳の分からない俺は、眉間にシワをよせた。

「可哀相だから飼うんだって！やったー俺犬好きだもん」

あきれた。

こいつは中3にもなって犬ごときではしゃぐのかい。

「あのな、今俺達は大事な話をしていたんだ。そんな話をわざわざ俺にしにこなくてもいいだろ」

「あ…おとりこみ中だった？すいません。兄がお世話になってます」

そう言つて、圭太は吉野の方にくるりと体を向け、頭をさげた。

「いやいや、気にしなくていいんだよ。ていうか、弟いたんだね、村上君で」

何が楽しいのか良く分からないが、楽しそうな顔をして吉野は言った。

「んーまあね。中3なのにすごいガキだけど」

おい、ガキつて言うなよ！

圭太が俺に向かって牙をむけると、吉野はクスクスと笑った。

「ふふふっ、仲がいいんだね」

「そうかあ？」

俺が言つと、

そうだよ

と吉野は満面の笑みで言った。

なんか可愛い…笑顔。  
さっきも思ったけど本当に可愛い。

もう一回見たくなるな…なんて思いながら、なんとか弟を追い払うことに成功した。

その日は、吉野と二人で一緒に帰った。

意外と家が近かったというのも発覚したし、自分の家の家族の話だとか、好きなバンドの話だとか、色んな話をした。

吉野とこんなにたくさん話したのは初めてで、凄く新鮮だったけど、思いのほか趣味が一致していた。

はっきり言って、かなり楽しかった。

こいつがホモでも、別に言いふらすつもりなんか無い。  
ていうか、気にしなればいいことだし。

ただ一つ気になるのは、吉野が言いかけた  
「で、この際だから言っちゃうけど…俺の…」

というこの言葉。

俺の…なんだろう。

まあそのうち分かることだろう。

そう思って、

新鮮な気持ちの余韻を残したまま、俺は自分の部屋のベッドで眠り  
におちていった。

## 2 妙な気持ち

翌朝。

ちちちち…

と鳥の鳴き声がする。

時計は朝の7時30分を指していた。

顔を洗おうとベッドから立ち上がると、起きたばかりだからなのか、体がふらりとした。

うわ…眠い。

くわあーとあくびをすると目に涙が滲んだ。

ワンワン！

突然ドアの向こう側から犬の騒がしい鳴き声が出た。

え…何故犬が…

ワンワンワン！

「あーもう、うるせ…」

扉をがちゃんと開けると、そいつは何のためらいもなく俺の領地に侵入してきた。

そうだ。

こいつは昨日母さんが拾ってきた子犬…

柴犬か？

全体的に、色は柴犬特有の薄い茶色だった。

よく見ると…けっこう可愛いもんだな。

「よしよし」

ポンポンポン、と頭を軽く叩いてやると、そいつは嬉しそうな顔を  
して、退散していった。

\*\*\*\*\*

「おはよう村上君」

「あ、…はよ」

教室に入ると、一番に挨拶してくれたのは、なんと吉野だった。

俺は驚いて目を丸くする。いつも最初に声をかけてくれたのは、たけちゃんだったのに。

でも、なんかちょっぴり嬉しかった。

「昨日はありがとね」

吉野がにこにこ笑って俺の肩をつつく。

「ありがとってなにが…」

「え？いやだなあ！一緒に帰ってくれてありがとってことだよ。凄く楽しかった。」

ああ…そういうことか。

「いや、俺の方こそ楽しかったよ。吉野とこんなに気が合うとは思わなかった」

「はははっ俺も！あ、あのさ…もしよければ今日も一緒に帰ってくれない？」

「  
吉野からの意外な言葉に、俺は素直に首を縦にふった。

「いいよ、俺もどうせ一人で帰る予定だったし」

ちょうど吉野と帰る約束をしていたとき、担任の桜木がドアをがらつと開けて教室に入ってきた。

「おーい、席つけよー」

その言葉とともに、教室に散らばっていた生徒たちが自分の席に座っていく。

俺は、妙に胸がどきどきしていた。  
甘酸っぱい香りがする。鼻をすーっと抜けていく不思議な感覚。  
なんだろう。

吉野の笑顔が頭から離れない。  
もっと見たい。

俺、どうしちゃったんだろう…。

不安な気持ちを抱いたまま、1時限目の授業が始まった。

## 2 妙な気持ち（後書き）

やっと2話きました^^

読んで下さった方がとうございます#

この二人の今後の展開を楽しみに待っていて下さいね！

ご感想や評価などを頂けるとうれしいです！

お待ちしております \

### 3 不意打ち（前書き）

### 3 不意打ち

放課後、いつも通りチャイムとともに俺と吉野は下駄箱を出た。

天気は快晴で、春らしい暖かな風が吹いている。

だめだ…なんか胸が苦しい。

吉野と一緒に下校するのも、もう5日目だ。

授業中もずっと吉野のことが頭から離れない。

日を増すごとに、俺の頭の中の吉野の存在はでかくなっていった。

これは一体なんなんだろう。

もしかして俺…吉野のこと…。

変な予感が頭をよぎる。

いやいやいや。

待て、落ち着け俺！

相手は普通に男だろ。

気持ちがあふわふわしている。

なんか自分が何を想っているのか分からなくなってきた。

「どっしたのー」

吉野の声で、はっと我に返る。

今、俺は吉野とバンドの話だとかをするために、気が合う友達同志として一緒に下校してるのだ。

俺は何を…

「ごめん、なんでもないよ。で何の話だっけ？」

「え、だから今流行ってるロッカーズってバンドについてだろ。俺newシングル買ったよ」

吉野は、もう金ねえよーと言って笑う。

「あー、そか。ごめん。まじ？シングル買ったのかよーいいなー俺金欠だから」

「今度貸そうか？」

「え、…いいの？」

「遠慮すんなー秘密を知ってる仲だろー」

そう言つて、吉野は肩をくんできた。  
ずっしりと肩に重みが増す。

なんか、近いな。

とかいって恥ずかしくなっている俺は相当キモい。

「ねえ、村上君」

「へ？」

顔を吉野の方に向けると、急に顔つきが真剣になっている気がした。

「……俺と付き合つてよ」

……は？

その瞬間、俺の思考回路は停止した。

ボスッ

同時に、手に持っていた鞆が地面に落ちた。

### 3 不意打ち（後書き）

長いこと引っ張ってしまってますいません！

あの二人の関係にもそろそろ変化が…？

感想や、応援のお言葉を頂けると、とても支えになります。  
よろしく願います#

#### 4 好きなところ

いきなり何を言ってんだこの人。

付き合っ……って？

それは両想い通しの男と女がやることではないのでしょうか。

あ、こいつホモだっけ。

「ごめんね、いきなり言っちゃって驚いた？」

全身固まって口をあんぐり開けている俺を見て、吉野は心配そうに声をかけた。

「え……大丈夫……だけど。っ、付き合っ？俺と？」

「うん」

にこー。

出た、吉野お得意のスマイル。

なんか、頭の整理が追いつかない……。

「…か俺と付き合いたいって何故？」

「なんで…？吉野。なんで俺なの？」

「えっ、何でって…」

好きになったからに決まってんじゃない。

サラッとこう言った吉野が、一瞬かつこよく見えてしまった。

「は…え…？俺のことが好き…なの？」

「うん、好き。」

「ど…こが？」

手が震える…。

心臓がどきどきしてやばい。苦しい。

それに比べて吉野は涼しげな顔をしている。

「村上の好きなの？まず第一に顔」

がくっ。

「おっおい、顔かよ」

顔って…お前はチャライ女子か！

とつつこみたかったが、吉野が言葉が続けたので止めた。

「それは初めに思ったことだからね？普通にカッコいいなーと。最初はそれだけだったけど、何度か帰っているうちに、どんどん気になっちゃったもん。話すとすっごい面白いし気も合うし、手とか大きいし、繋いだらあったかそうだなーとか、色々考えてた。」

「そっか…」

今、俺の顔は照れ臭さで真っ赤になっていると思う。

こんなに面と向かって好きと言われたのは初めてかもしれない。

告白されたことはあるけど、手紙とかメールばかりだったし。

正直、最初は動揺したけど、そういうのって凄く嬉しい。

「そんなに俺のこと好きなんだ…俺なんかと付き合ってもいいことないと思うけど？」

わ…なにこのセリフ。  
自分で言って失敗したと思った。

でも、吉野はニコッと笑って、俺に抱きついた。

うわわー…

抱きつかれてるし。

ぎゅーと締め付けられてるのが分かる。腕に相当力をこめてるようだ

「え…ちょ、よし…人に見られる…」

心臓がバクバクする。つーか何、俺も腕まわした方がいいのかこれ。

震える腕を、必死で吉野の背中にまわした。

あ…なんかいいなこれ。

人肌が…あつたけー。

俺、男と普通に抱き合ったりできてるよ。

やばいなー。

そう思いつつも、けっして嫌ではないのだ。

むしろ心地いい。

「付き合って…くれる？」

抱き合っただままの状態で、吉野が口を開いた。

俺は何も言えなかった。

「ねえ…ほんとに好きなんだ。本気だよ？俺もっとお前のことよく知りたい…もつと触りたい」

そう言っただけ吉野の手が俺の顔の方にのびてきた。

指が、俺の唇をなぞる。

「キスとかもいっぱいしたいし…ごめんね俺キモくて。ホモだし。いきなり言われても困るよね」

キスって…。

俺はさらに顔を真っ赤に染めた。

恥ずかしいし顔が熱い…熱があるみたいだ。

「俺も…お前のこと好きだよ。でも、それは友達としてかも知れないし、まだはつきり分らないんだ…」

吉野は小さく溜息をつく。

「そっだよな、ごめん」

「いや、そんな謝らなくても…！」

「ある程度、自分の気持ちをまとめてから返事くれな！」

ふわりと吉野の体が俺から離れていった

「うん、明日までに出すから…絶対に」

おっけー！

そう言っつて吉野は足早に家路を急いだ。

嘘だろ。

男に告られたなんて初めてだ。

今だに心臓がドクドクいつている。

俺は、少しふらついた足どりで自宅へ帰った。

#### 4 好きなところ（後書き）

くっつけ村上と吉野！早く付き合っちゃえばいいのですよ  
そしていちゃこらしているシーンをかきたいです 笑

## 5 恋の行方

家に帰ってから色々と考えた。

吉野の、あの真剣な表情を思い出すと、複雑な気持ちになる。

でも、本当に俺の事が好きなんだってことは伝わってきた。

だ…抱きしめられたし。

吉野っていうやつは、かなり大胆な男だと思う。

というか、ホモって大体ああいうもんなのかな。

おそろしい。

って、ホモに告られてどうしようか迷っている自分も人のこと言えないが。

「もつとお前のこと知りたい…触りたい」  
だど!?

なんで俺がそんなこと言われなきゃいけないんだ。

でも、やっぱり俺も、吉野の良いところをたくさん知ってしまったし。

あれは二回目の一緒に下校の時だろうか。

雨が降っていて、俺は傘を忘れたけど、吉野は濡れて帰るからと言って、俺に傘を貸してくれた。

一緒に入ろうとかは一切言い出さなかった。俺の事を気にかけてくれたんだろう。

一緒に傘入ってたら俺まで変な風に見られてしまうから、気遣ってくれたのだ。

二人で帰っていたのに、その日は俺だけ傘をさして下校した。

綺麗な顔立ちで真面目そうなのに、俺と同じくバンドとか凄い好きで、その話するとはっちゃけてて。

だから、俺も下校するのが楽しかった。

何も気を遣わなくていい…それが凄く心地よかった。

\*\*\*\*\*

「俺さ、吉野と付き合ってもいいよ」

次の日の帰り道。

俺はついになんか言った。

「ま、まじか…?」

「まじだよ。…俺もたぶんお前のこと…す、好き…」

顔が一気に熱くなった。

恥ずかしくて死ぬー。

「嘘みたい…：すげうれしい…：」

吉野が、自分の顔を手で覆っていた。

「な、なんで顔かくしてんの…：」

俺が言うと、

「うっさい！今絶対顔ニヤけてるから見せたくない…：」

と、耳を真っ赤にしながら答えた。

こうして、俺と吉野は、はれて恋人どうしとなったのだった。

\*  
\*

## 5 恋の行方（後書き）

やっと恋人になりました！おめでとう笑

これからが本番です…いちゃいちゃしてるの書きたいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7588k/>

---

好きならもっと！

2010年10月9日01時40分発行